

異文化コミュニケーション  
日中言語文化交流におけるカオス理論から見た漢字の変遷  
— 漢字のバタフライ・エフェクト —

水 原 寿 里

Intercultural Communication  
Chaos theory and the evolution of Chinese characters through history  
— Butterfly Effect of Kanji —

Juri Mizuhara

キーワード 異文化コミュニケーション カオス理論 バタフライ現象

## 1. はじめに

春には、ツバメが、梅には鶯が、桜が咲き、夏には、蝉が、秋には、海亀が、鮭が産卵に、鶴が、日本に戻ってくる。自然界は偉大で、不思議なことが沢山ある。歴史は繰り返されるというが、人間界においても、回帰、輪廻があり、不思議なルールがあるように思える。

1960年、気象学者ローレンツ<sup>1</sup>によって、カオス理論（混沌学）が発表され、日本でも京都大学上田院亮が1961年、非線形常微分方程式を解析する電気回路で発生したカオスを物理現象として観測し、不規則遷移現象と称してカオスの基本的性質を明らかにしていた。カオス理論のバタフライ現象を漢字の変遷と考え合わせると、中国からの漢字の伝来があり、その文化を懸命に取り入れ学んだ遣隋使や遣唐使の学僧や留学生の努力と、明治維新の頃の中国の留学生の努力した姿が重なって見える。日本は漢字から片仮名や平仮名を造り、日本独特の文化を作り上げ、江戸末期には、欧米文化の到来で、鎖国から脱皮するために、藩や

<sup>1</sup> ローレンツ（Edward Lorenz）：気象学者は数学モデルで証明した。

日本政府は使節団を欧米に送り、欧米の文化を漢字や片仮名、平仮名で翻訳した。中国は日清戦争後、翻訳された日本語から西欧文化を吸収し、建国に役立たせた。以上のように漢字は変化しつつもその時代時代の文化を伝えている。筆者は漢字を通じて、感じるもの、人の心を漢字言葉から漢字の流転に興味を持ち、漢字の字体から漢字本来の意味が理解できることに着目し、漢字の変遷と留学生たちによる文化の運搬、知の回帰、知の回廊についてカオス理論を通して研究した。

## 2. カオス理論におけるバタフライ現象

1972年12月29日アメリカの気象学者ローレンツが139回アメリカ科学発展学会でバタフライ現象の論文を発表した。その発表の内容は、ブラジルに一匹の蝶々が羽ばたけば、テキサス州に竜巻が起こるという論文であったので、学会に大きな反響を呼んだ。

バタフライ効果とは、カオス力学系において、「初期条件のわずかな差が時間とともに拡大して、結果に大きな違いをもたらす。そしてそれは予測不可能」<sup>2</sup>という象徴的な表現である。その内容から人生観や世界観を語る中で用いられることも多い。したがって、言語学や文化にも応用できる。カオスの名前の起源は、ギリシャ神話におけるカオスは原初の神々のことで、世界（宇宙）が創造された時、事物が存在を確保できる場所（コーラー）が必要であり、何もない「場」、すなわち空隙として最初にカオスが存在し、その中に、例えば、大地（ガイア）などが存在した。ヘーシオドスは、カオスをまたカズム（裂け目）とも呼んでいる。『神統記』<sup>3</sup>によれば、カオスの生成に続いて、ガイア（大地）が生まれ、次に暗冥の地下の奥底で支配するタルタロスと美しきエロース（原愛）も生まれた。カオスの子（カオスより生まれたもの）は、エレボス（幽冥）と暗きニュクス（夜）である。更に、ニュクスよりアイテール（高天の気）とヘーメレー（昼光）が生まれた。世界はこのようにして始まったとヘーシオドスは謡っている。ギリシャ神話では立派な神と相対する悪の神を創った。その中間に善と悪を兼ね備えた神、カオスを創り、暗黒・混沌の世界を行き来できる神として人間の心を真の位置に戻す存在を持つ神がカオス神である。中国のカオスは混沌説（哲学者荘子の思想）において、中国古典『莊子』<sup>4</sup>「応帝王」第七篇文中有:「南海之帝為儵, 北海之帝為忽, 中央之帝為渾沌。儵與忽時相與遇於渾沌之地, 渾沌待之甚善。儵與忽謀報渾沌之德, 曰:「人皆有七竅以視聽食息, 此獨無有, 嘗試鑿之。」日鑿一竅, 七日而渾沌死。」とある。(南海の帝を<sup>しゆく</sup>な<sup>な</sup>し、北海の帝を<sup>こつ</sup>な<sup>な</sup>し、中央の帝を<sup>こんとん</sup>渾沌と為す。儵と忽と、時に相与<sup>あいとも</sup>に渾沌<sup>あ</sup>の地に遇う。渾沌、之<sup>これ</sup>を待つこと甚だ善し。儵と忽と、渾沌の徳に報いんこ

<sup>2</sup> カオス理論を端的に表現した思考実験のひとつ

<sup>3</sup> 『神統記』とは、紀元前700年頃の古代ギリシャの詩人ヘーシオドス作の叙事詩である。

<sup>4</sup> 荘子は、(紀元前369年-紀元前286年と推定されている)は、中国の戦国時代の宋国(現在の河南省)に産まれた思想家で、道教の始祖の一人とされる人物である。

とを謀<sup>はか</sup>りて、曰わく「人皆七竅<sup>い</sup>有りて、以て視聴食息す。此れ独り有ること無し。嘗<sup>こころ</sup>試みに、之を鑿<sup>うが</sup>たん。」と。日に一竅<sup>うが</sup>を鑿つに、七日にして渾沌死せり。) この文章にある「儻<sup>しめく</sup>・「忽<sup>こつ</sup>」・「渾沌<sup>こんとん</sup>」の名称は、寓話の中の代表的な神の名前である。「儻<sup>しめく</sup>」と「忽<sup>こつ</sup>」の神は、迅速を表した意味である。また叡智と機敏さを喩える言葉である。中国でもギリシャ神話の記録に遅れること約500年後に、混沌の言葉が表れた。日本の混沌説は、そのほとんどが『古事記』、『日本書紀』および地方各国の『風土記』に見られる。その中に出てくる神は、高天原<sup>たかまがはら</sup><sup>5</sup>の神々で、黎明期に「混沌」とした中から神々は日本を創造した。古事記は、和銅5年(712年)太安万侶<sup>おおのやすまろ</sup>によって、献上された日本最古の歴史書で、その中に「混沌」が記載されている。高天原<sup>たかまがはら</sup>で、世界最初の別天津神・神世七代という神々が生まれた。これらの神々の最後に生まれてきたのが、イザナギ・イザナミ<sup>6</sup>である。日本の神話によると太古の始めに、日本建国の神イザナギ・イザナミが、倭国を高天原に創った。前述のギリシャ、中国と同様に、太古の天地創造は、日本でも同じような神話が残っている。最近では、気象学・天文学・生理学・国際政治学・交通運輸などの分野でカオス理論は応用されている。例えば、山口昌男<sup>7</sup>(東京外国語大学名誉教授)によると、混沌の概念は文化の中心に位置し、または近い事象であればあるほど、一元的であって差異性の強調がなされる。それに対して、周縁的な事物についての概念は、それが明確な意識から遠ざかって「曖昧性」を帯びてくる。曖昧と多義性の表層的な意味は他の語と識別されているが、潜在的には結びつきを持っている。この曖昧性を混沌といい、昼は恒常性・秩序・和・光・理性・友愛・恩情と喩えたら夜は秘密・呪術・奇蹟・発明・想像・暴力である。その中間にある仲介者の相貌を帯びていることを混沌である。筆者は文学の部門、特に漢字の変遷についてカオス理論を活用して考察した。

### 3. 漢字の歴史

漢字は4千年前中国の黄河文明の時代に生まれ、中国の大多数の漢民族の人々に漢語として使われ、記録を保存するために文字として使われ、漢字と呼ばれるようになった。現存する最古の漢字資料としては甲骨文字がある。甲骨文字の年代は中国最古の王朝である殷(BC1300頃～BC1000年頃)の後半期と推定されている。日本は漢字文化圏の一員で、仏教伝来とともに、中国、韓国から漢字を導入されたと考えられている。その漢字を、日本人は書き言葉として、漢字から片仮名や平仮名を作り、日本独自の文体を作った。1899年「金

<sup>5</sup> 『古事記』の日本神話と祝詞に於ける天津神の住まう場所である。

<sup>6</sup> 天地開闢において神世七代の最後にイザナギとともに生まれた。国産み・神産みにおいてイザナギとの間に日本国土を形づくる多数の子を設ける。その中には淡路島・隠岐島からはじめやがて日本列島を生み、更に山・海など森羅万象の神々を生んだ。

<sup>7</sup> 山口昌男著、『文化と両義性』岩波書店、1975年。P3-6、P10-19、P203-222

石学者」王懿榮<sup>8</sup>と文字学者劉鶚<sup>9</sup>が甲骨文字<sup>10</sup>を発見した。金文文字は殷王朝の卜師たちが占いに使っていた、殷の国が滅び、周の国の時代になると、青銅器に鑄込んだり刻んだりするようになった。金属に刻み込むので直線が多く使われるようになった。春秋時代<sup>11</sup>になると、中国の百家争鳴の時代であり、孔子<sup>12</sup>やその弟子が活躍し、たくさんの漢字を使って孔子と弟子達の思想を言行録を記録し、『論語』<sup>13</sup>に纏めた。朝鮮半島の百済の和邇吉師（日本書紀では王仁）が、論語十卷、千字文一卷を日本に伝えた<sup>14</sup>。その後、戦国時代<sup>15</sup>に入り、秦の始皇帝が文字の統一を図り、祭祀用の文字と文書用の文字のいずれも篆書の系統に変えた。日本への漢字の渡来は、応神天皇の時代で、『古事記』や『日本書紀』は漢字で書かれたものである。

### 3-1. 甲骨文字

神様との交信（占い）のために、4千年くらい前、甲骨文字を作った。殷（約西暦前17～11世紀）の国のリーダーである王様が天気やこれから起きる出来事など、人間の知恵では分らない将来について、神様にお伺いを立て、亀の甲羅や牛の骨に文字を刻み裏側に掘った穴に火のついた棒を押し付けて熱を加え、ひびを入れる。その割れ方で吉か凶かを判断した。この文字を解読することで、当時の人達の生活の様子や考え方が見えてくる。甲骨文字は、明らかに漢字の祖型である<sup>16</sup>。今日知られる最古の漢字である。殷王朝の占いの記録だった甲骨文字は、中国最古の体系的文字である。現在までに、約15万枚の甲骨片が発掘され、4500以上の字を発見された。これらの甲骨文字を使って記載された内容は極めて豊富であり、政治、軍事、文化、社会風習から、天文、暦法、医薬などの科学技術まで、商の時代の社会生活の多くの分野に及ぶ<sup>17</sup>。判別可能な1500字から、「象形」「会意」「形声」「指事」「転

<sup>8</sup> 王懿榮は清末の金石学者。

<sup>9</sup> 王懿榮と文字学者劉鶚の二人は、北京の薬屋で買った「龍骨」と称する骨の表面に刻されている文字を偶然に発見し、甲骨文字の存在は始めて学界に発表された。その後、劉鶚はさらに大量の甲骨を集め、やがて1903年に五千点以上の甲骨の中から、文字が比較的鮮明なものを選んで拓本に取り、「鉄雲藏龜」（てつうんそうき）という名で公開した。

<sup>10</sup> 甲骨文の年代は中国最古の王朝である殷（BC1300頃～BC1000年頃）の後半期と推定されている。

<sup>11</sup> 春秋時代は紀元前770年から紀元前403年までである。

<sup>12</sup> 孔子は紀元前551年9月28日-紀元前479年4月11日、春秋時代の中国の思想家。儒家の始祖。

<sup>13</sup> 『論語』は中国古代、春秋時代の人・孔子とその弟子たちの言行録。四書五経の四書\*1の一つで、人間として守るべきまた行うべき、凄く当り前のことが簡潔な言葉で記されている。

<sup>14</sup> 千字文は、子供に漢字を教えるために用いられた漢文の長詩である。1,000の異なった文字が使われている。南朝・梁（502-549年）の武帝が、文官の周興嗣（470-521年）に文章を作らせたものである。

<sup>15</sup> 戦国時代は、紀元前221年に秦による統一がなされるまでをいう。

<sup>16</sup> 東京大学総合研究博物館の松丸 道雄『東アジアの形態と世界』の「殷武丁期刻辞牛肩胛骨」の項を参照 p15-30

<sup>17</sup> 河南省安陽中国文字博物館である世界遺産殷墟博物館の『中国最古の文字甲骨文字』の項を参照。2009年10月。

注」「仮借」の造字法からなっていることが分かり、中国文字の独特な四角い魅力を見せている。

### 3-2. 金文文字

金文<sup>きんぶん</sup>とは、歴史から見ると、紀元前2000年ごろ、青銅器の表面に鑄込まれた、あるいは刻まれた文字である。「金」はこの場合青銅の意味である。中国の殷・周のものが有名。年代的には甲骨文字の後にあたる。殷は青銅器文化が非常に発達した時代であり、この文字を器の表面に鑄込む高度な技術は有名である。次の世代に文字を伝えるメッセージとして青銅器に、金文文字を書き残した。初期は「図象記号」「図象文字」「族記号」と呼ばれるマークのようなもので、西周期まで1200種ほど確認された。初期は記号のみ鑄込まれ、やがて文章の末尾に鑄込まれるようになった。文字として読み下すことが困難で、果たして何を表すものなのか解明されていないのが多い。時代的には、殷金文（B.C.1300頃～B.C.1070頃）、西周金文（B.C.1070頃～B.C.771年）、東周（または列国）金文（B.C.770年～B.C.222年）、秦漢金文（B.C.221年～A.D.219年）に分類される。始皇帝の統一をもって列国の争乱は終わり、多種多様に発展した事柄を統合し規格化する段階になった<sup>18</sup>。特に秦漢金文の時期に、秦の始皇帝は焚書坑儒を通して文字・言語の統一を図り、列国の多様な文字文化を廃した。統一規格の文字を広めることも兼ねて、自らの武威を示すために泰山をはじめ各地に刻石碑を建立している。

### 3-3. 木簡・竹簡文字

漢字の移り変わる過程でもっと沢山の記録やメッセージを残す為に木や竹の札に筆で文字が書かれるようになった。それが木簡や竹簡と呼ばれるもので、糸で綴って長い巻物になり、現在の書籍（本）に当たるものであった。2000年前の春秋戦国時代には木簡や竹簡にいろいろな情報が書かれた。木簡の特徴の一つは、削って書直したり再利用したりすることができるという点にある。そのため当時の文具には筆、墨、硯に加えて小刀が含まれていた。削り屑に習字した例もあり、上述の広義の木簡に含まれる。中国では竹に文字を書いた竹簡が主流で、単に簡や簡牘といえは竹簡を指す。しかし黄河流域以北で木簡も広く用いられた。紙が普及しない漢代まで、木簡・竹簡は文書の材料として広く用いられていた。木簡と竹簡の相違は、その用途の相違によるものとも考えられる。つまり、各種の証明書や検・檄・符などの単独簡として用いられる簡には木簡が用いられ、それに対して、書物や簿籍などの編綴簡には竹簡が用いられている、という出土状況から、そのように考えられている。漢代の一般的な簡牘は長さ一尺（23cm）、皇帝用の簡牘は長さ一尺一寸（25cm）、経書用の簡牘は二尺四寸（55cm）と、用途に応じた定型で作られ、文章が長くなるときにはつづりあわせ

<sup>18</sup> 白川静 著、『統文字講話』金文について I、平凡社、2007年2月。Pp55-92



て冊（編綴簡）にした。木簡・竹簡の製作に手間隙がかり情報の伝達に時間がかかり、持ち運びも不便で、保管も難しいなどの問題があった。

### 3-4. 石刻文字

後漢時代（25年-196年）石に文字を彫刻する技術があった。主に仏教の経典・仏像或は墓碑・印鑑などに使われていた。石刻文字は特殊な技能を持った石工が、仏典などの重要な文章、権威者の威厳を表す印鑑を、多くの労苦をかけて製作した。この技術が 仏像の製作にむけられ、書籍にはあまり向けられなかった。石刻は、墓碑に多く使われているのは、盗難防止という説も有るのと後の世にまで故人の霊や魂と名誉を後世まで残す上で最も良い方法であると考えられる。また、現在も墓碑として使われているのは不思議なことである。

### 3-5. 活版応用の文字字体（明朝体・楷書体）

『説文解字』<sup>せつもんかいじ</sup>によると、105年には布や木屑を溶かして作った不織布、紙が発明され、活版印刷が行われていた。明朝体・楷書体などは、現在のパソコンの時代にまで使用され、文字の綺麗さを表現するのに適している。

蔡倫は宦官として偉大な功績を挙げた人物として、司馬遷・鄭和と共に後世から称揚された。中国では、特に伝統的な紙漉き職人たちの間で、蔡倫は紙の守護神として崇拝されている。蔡倫は現在においても多大な影響を与えている。紙の発明により、毛筆における書体、印刷の活字製作の技術で、多くの出版物が作られるようになり、中国人の識字率が上がり、漢字を通して中国文明が世界に広められた。

## 4. 漢字の生い立ち

### 4-1. 中国の言語研究のための辞書（2300年前に遡る周・秦時代から中国独自の言語研究辞書）

漢字のいわれを調査するに当たって、次の辞書を通り過すわけには行かない。

1. 「字書」：『説文解字』・『玉篇』<sup>ぎよくへん</sup>。漢字の構造によって、分類・配列し、その意味を説いたもの。
2. 「韻書」：『切韻』<sup>せつゐん</sup>。南北朝時代から多く編まれ出した漢詩作成のための参考書。
3. 「義書」：『爾雅』<sup>じが</sup>。漢字の義、すなわち意味にしたがって分類・配列したもの。

日本最古の漢字典は平安時代初期、空海が編纂したという『篆隸万象名義』<sup>てんれいばんしょうめいぎ</sup>である。次に昌住によって『新撰字鏡』といった漢和辞典が編まれた。院政期には『類聚名義抄』<sup>るいじゅみょうぎしょう</sup>が作られている。これらは漢字を字形によって分類した字書『玉篇』の影響を受けている。室町時代には『倭玉篇』<sup>わこくへん</sup>（和玉篇）という漢和辞典が編まれ、室町・江戸を通じて流行し、「倭玉篇」が漢和辞典を指す代名詞であった。一方、『爾雅』の影響を受け、漢字を意味別に分類したものには、平安時代中期、源順によって編纂された『和名類聚抄』がある。また、

漢字の字音を研究・分類した韻書として、南北朝時代の『<sup>しゅふんいんりやく</sup>聚分韻略』がある。

#### 4-2. 六書（象形・指事・会意・形声・転注・仮借）

漢字の構成は次の六書からなっている。具体的な内容は『説文解字』の序に従うと、以下のようなものである。①象形—物の形をかたどって字形を作ること。日・月・木・耳など。②指事—位置や状態といった抽象概念を字形の組み合わせで表すこと。上・下・本・末など。③形声—類型的な意味を表す意符と音を表す音符とを組み合わせで字を作ること。江・河など。④会意—象形と指事によって作られたものを組み合わせで新しい意味を表す字を作ること。信・武・林・炎など。⑤転注—用字法の一つとする説が有力であるが、定説はない。⑥仮借—他の同音・類字音の字を借用すること。「わたし」の意味に「我」、「くる」の意味に「来」など。

#### 4-3. 中国古代漢字の構成の三要素

漢字は「形」・「音」・「義」の三要素から構成されている文字である。「形」とは、その語を表記する符号である。「音」とは、文字の発音、言い換えれば、語そのものである。「義」とは、文字によって表現される概念（意味）である。

#### 4-4. 中国少数民族の文字の書体

中国は広く、昔から沢山の少数民族から構成されていて、言葉や文字も地域毎に異なる。秦の始皇帝は次項に示すように漢字の統一を行ったが、現在は56の民族が存在しており、図に示すようなその一部の民族の書体で2008年オリンピックのキーワード「世界は一つ、心も一つ」を現存する民族の文字の一部である。



#### 4-5. 秦始皇帝による文字の統一

中国の戦国時代は、宗教的な文字から政治的な文字への転移期で、秦始皇帝時代（前246-210年）の金文から篆書への移行は、世界史上の最大の事件であった。アルファベット言語圏・ヨーロッパ言語圏の違いを作った。政治的、軍事的ではなく、文明文化的観点から言えば始皇帝の築いた万里の長城は、東アジア漢字文明圏、非漢字文明圏との圏境線となった。

#### 4-6. 漢字の書体：隸書・篆書・行書・草書

秦の始皇帝が作った小篆は次第に崩れて隸書を生み、隸書が更に崩れて草書、楷書、行書を生んだ。①隸書：中国の戦国時代紀元前403年左右から紀元前221まで払いで波打つような書き方で一字一字横長が主な特徴。②篆書：三千年以上も昔の中国で生まれた古代文字で、文字の形は天地が長い長方形の辞界に収まるように作られ、点画は水平・垂直の線を基本とし、円弧をなす字画はすみやかに水平線・垂直線と交差するように曲げ、画の両端は丸く、線はすべて同じ太さで引かれる。③行書：4世紀頃、行書は隸書の走り書きに興る。王羲之などの書が有名。行書は草書と楷書の中間的な存在で、明確な線引きは不可能である。④草書：漢の時代に篆書・隸書から発生した。草書体は「章草」と呼ばれ、現在のように文字を続けて崩していく形式ではなく、一字一字を崩していく形式。後に、日本の平仮名に影響する。

### 5. 日本への漢字の導入

日本人は紀元六世紀から七世紀にかけての推古朝のころから、本格的に中国や朝鮮半島から、儒教、仏教、道教といった思想、宗教などを受容してきたが、常に介在していたのが漢字で、日本人は漢字の影響を常に受けていた。朝廷は進んだ中国の文化を取り入れるために、多くの学僧を派遣し、日本の文化の向上に努め、文化の伝承のため、漢字を沢山学び、記録し、中国の文化を持ち帰った。

#### 5-1. 遣隋使

遣隋使とは、推古朝の倭国が隋に派遣した朝貢使のことを言い、600年（推古8年）～618年（推古26年）の18年間に5回以上派遣されていた。①600年（推古8年）第1回遣隋使阿每多利思北孤阿鞞羅弥を派遣。この頃まだ倭国は、外交儀礼に疎く、国書も持たず国交した。（『隋書』倭国伝）<sup>19</sup>。②607年（推古15年）、608年（推古16年）第2回遣隋使の派遣。小野妹子（おののいもこ）らが遣わされた。「日出処の天子……」の国書を持参した。小野妹子は裴世清らとともに住吉津に着き、帰国した。（『日本書紀』、『隋書』倭国伝、『隋書』煬帝紀）③608年（推古16年）～609年（推古17年）第3回遣隋使の派遣、小野妹子や吉士雄成などが隋に遣わされた。この時、学生として倭漢直福因、奈羅訳語恵明、高向漢人玄理、新漢人大罔、学問僧として新漢人日文（後の僧旻）、南淵請安ら8人が隋へ留学した。（『日本書紀』、『隋書』倭国伝）④610年（推古18年）第4回遣隋使の派遣。（『隋書』煬帝紀）。⑤614年（推古22年）615年（推古23年）第5回遣隋使の派遣。犬上御田鋏、矢田

<sup>19</sup>『隋書』の最大の特徴は、この十志30巻である。それは、本紀および列伝55巻が『漢書』に始まる断代史の体裁をとっているのに対し、この十志が『史記』や『南史』、『北史』と同様の通史であるからである。



部造らが隋に遣わされた。百濟使が犬上御田鍬に従って日本にやって来た。(『日本書紀』)  
 ⑥618年(推古26年)隋の滅亡により遣隋使の派遣は終了した。遣隋使の目的は、東アジアの中心国・先進国である隋の文化の摂取が主であるが、朝鮮半島での影響力維持の意図もあった。この外交方針は次の遣唐使の派遣にも引き継がれた。

## 5-2. 遣唐使

遣唐使は、『旧唐書』<sup>20</sup>や『新唐書』<sup>21</sup>にも記されている通り、倭国が唐に派遣した朝貢使のことをいう。国では619年に隋が滅び、唐が建国したので、それまで派遣していた遣隋使に替えてこの名称となった。寛平6年(894年)に菅原道真<sup>22</sup>の建議により停止された。遣唐使の目的は、海外情勢や中国の先進的な技術や仏教の經典等の収集であった。第一次遣唐使は、630年(舒明2)犬上御田鍬いぬかみのみ た すきの派遣によって始まった。その後、唐僧維ゆいけんの書に見える「二十年一來」(20年に1度)の朝貢が8世紀ごろまでに規定化され、およそ数十年から数十年の間隔で遣唐使の派遣が行われた。遣唐使は200年以上にわたり、当時の先進国であった唐の文化や制度、そして仏教の日本への伝播に大いに貢献した。遣唐使一行は、『延喜式』大藏省式によると、大使・副使・判官・録事・知乗船事・訳語生・請益生・主神・医師・陰陽師・絵師・史生・射手・船師・音声長 新羅、奄美訳語生・卜部・留学生・学問僧・倭從・雜使・音声生・玉生・鍛生・鑄生・細工生・船匠・柁師・倭人挾抄・水手長・水手などの職種で構成されていた。

唐では874年頃から黄巢こうそう の らんの乱が起き、黄巢は、洛陽・長安を陥落さて、斉(880年-884年)を成立させ、斉は短期間で倒れたが、唐は弱体化して首都・長安周辺のみを治める地方政權へと凋落した。このため遣唐使は、894年(寛平6年)の派遣が菅原道真の建議により中止された。907年(延喜7年)には唐が滅亡し、遣唐使は再開されないままその歴史に幕を下ろした。日本の中国文化の導入は、遣隋使、遣唐使の多くの学問僧と留学生の労苦によるものである。さらに、西暦57年、後漢の光武帝から「金印」が授与されたという、歴史的事実がある。したがって日本人の中に漢字を理解できる人がいたことにもなる。しかし漢文は難しく、日本人は漢字を利用して日本語を表現できるものとした片仮名や平仮名を作り、万葉集を一般化するために、万葉仮名を作った。

<sup>20</sup>『旧唐書』(くとうじょ)は、中国五代十国時代の後晋出帝の時に劉昫らによって編纂された歴史書。二十四史の一つ。唐の成立(618年)から滅亡まで(907年)について書かれている。

<sup>21</sup>『新唐書』には日本の歴史も略述されている。「神の代」に属す日本の支配者33人がリストアップされている。『日本書紀』などが掲げており、「人の代」に属す歴代天皇58代(神武天皇から光孝天皇まで)も列挙されている。

<sup>22</sup>菅原道真は、(845年～903年)は日本の平安時代の学者、漢詩人、政治家である。

### 5-3. 万葉仮名

古代人は漢字の音を借りて日本語の音に当てはめ、文章を書くことを工夫した。万葉仮名がこれである。漢字を早く書くためには、草書の体が必然的で、草書仮名への道が開けた。平安時代に入ると、和歌の復活があり、書道の発展の二面性にあいまって、より美しく、よりやさしい簡略な形へ進んで、今日の仮名が完成した。上代の万葉仮名は一つの音に対して数種の漢字を当てた。

一字一音の万葉仮名の一例：ア列 阿・安・英・足。カ列 可・何・加・架・香・蚊・迦。サ列 左・佐・沙・作・柴・紗・草・散。タ列 太・多・他・丹・駄・田・手・立。ナ列 那・男・奈・南・寧・難・七・名・魚・業。ハ列 八・方・芳・房・半・伴・倍・泊・波・婆・破・薄・播・幡・羽・早・速・葉・齒。マ列 万・末・馬・麻・摩・磨・満・前・真・間・鬼。ヤ列 也・移・夜・楊・耶・野・八・矢・屋。ラ行 良・浪・郎・楽・羅。ワ行 和・丸・輪。

例に示すように、中国から来た漢字を日本の音読みに当てて読むときに、同じような音が沢山あり、日本人は混沌として、類似した漢字を選択したため、「あ」には、阿・安・英・足などの文字を使っていたことが分かる。

### 5-4. 片仮名文字

万葉仮名の省略は8世紀初めから見られるが、片仮名の起源は、9世紀初めに奈良の古宗派の学僧が漢文を和読するため、訓点として万葉仮名を付記したものに始まると考えられている。それらは余白に小さく素早く記す必要があったため、字形の省略・簡化が進んだ。片仮名はその発生より、僧侶や学者によって漢字の補助として使われることが多く、ごく初期から仮名交文に用いた例も見られる。後には、歌集や物語をはじめ一般社会の日常の筆記にも使用範囲が広がったが、平仮名で書かれたものが美的な価値をもって鑑賞されるに至ったのと比べると、記号的・符号的性格が強い。

### 5-5. 遣隋使、遣唐使がもたらした文化

遣隋使・遣唐使がもたらした文化として、漢字の輸入と同時に中国のお菓子文化の取入れがある。609年小野妹子が遣隋使として送られ、中国大陆から菓子が伝わる。705年 遣唐使により、唐菓子8種、菓餅14種が伝えられている。754年唐僧、鑑真が蜂蜜、石蜜、蔗糖、甘蔗をもたす。804年最澄が唐より砂糖を持ち帰る。806年空海、唐国から煎餅の製法を伝える。815年近江崇福寺僧、永忠は天皇行幸のとき、茶を煎じて奉上、この頃から唐菓子の輸入が増える。禅宗の臨済宗を開いた栄西上人が宋より帰国、肥前、博多に茶を植える。1615年 明国の船が紀州浦に砂糖を積んで到着する。1662年 中国より白砂糖の製法を習い琉球に伝える。明治時代以降にヨーロッパなどから新しく日本に入ってきたよい洋菓子に対して使われる言葉。遣唐使によって伝来した唐菓子や、宣教師によってもたらされた南蛮

菓子も和菓子に含める。和菓子の種類と名前の一例：饅頭、時雨、鹿の子、蕨餅、大福、団子、羽二重餅、羊羹、最中、金鰐、銅鑼焼き、今川焼き、鯛焼き、人形焼、練り切り、雪平、外郎、小梨、飴、煎餅、落雁、金華糖、生姜糖、和三盆。季節の和菓子の例：菱葩餅、引千切、椿餅、鶯餅、蓬餅、花見団子、桜餅、柏餅、粽、若鮎、水無月、水饅頭、牡丹餅、月見団子、栗蒸し羊羹、亥の子餅、残月、黒豆。中国漢字の輸入と同時に茶道文化の取入れがある。1214年 栄西上人、喫茶養生記を著し、喫茶の風習おこる。茶道の進展に伴いそれに使用する菓子とし点心が発達する。羹類以外に麺類も点心として用いられる。主なものはうどん、鶏卵素麺、切麦、葛素麺、水鈍蝶結、きんとん、柳葉麺、桐皮麺、素麺、冷麺など。1241年 聖一国師、宋より帰国し酒素饅頭を伝える。鎌倉幕府は風流菓子を禁止する。1341年 林浄因、元より帰化し、饅頭の製法を伝える。遣唐使廃止以来、日本は漢字文化に独自に平仮名、片仮名を生み出し、表現豊かな文学と文化を創って来た。清少納言や紫式部に見られる女性の活躍がさらに文学の幅を広めた。当時の女性が文化をリードした。

## 5-6. 日本の文明開化と中国の文明開化

明治時代に入り、欧米から外来語が導入され、言語学に文明開化が到来し、益々文学の開花時代に突入した。1871年岩倉使節団政府のトップや留学生107名。使節46名、随員18名、留学生43名。使節は薩長中心、書記官などは旧幕臣から選ばれた。大使：岩倉具視、副使：木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、山口尚芳、一等書記官：田辺太一、何礼之、福地源一郎。二等書記官：渡辺洪基、小松清治、林董三郎、長野桂次郎、三等書記官川路寛堂、四等書記官：安藤太郎、池田政懋が選ばれた。政府のトップが長期間政府を離れ外遊するというのは異例であるが、直に西洋文明や思想に触れたという経験が彼らに与えた影響は大きく、留学生も帰国後に政治、経済、教育、文化など様々な分野で活躍し、日本の文明開化に大きく貢献した。文明開化と殖産興業により、日清戦争・日露戦争の勝利が日本の軍事的力の強さを示したので、中国は、亡国の危機に瀕していた清朝の志士達の「日本に学ぶ」の精神により、清国末年から中華民国の初期に日中戦争が始まる1937年までの40年間に、孫文、蒋介石、魯迅を始め、多くの留学生を日本に送り込み、彼らは、大量な日本文化と西欧文化を中国に持ち帰った。日本への留学生だけでも、延べ6万人が来日した。明治維新を経て近代化を急ぐ日本で西洋科学技術の文明を学び、短期間に大量の外国語を表意文字の漢字に翻訳した。その為、和製漢語でも、漢字本来の意味を踏まえて翻訳した科学技術用語のみならず、文学・哲学・宗教の用語なども中国人には理解しやすかった。このことは、和製漢語が大量に中国へ逆輸入された理由である。中国語には約1万語の外来語があり、大半はインドなどの西域から入ってきた仏陀や菩薩などの翻訳語であるが、そのうちの1千語余りが清朝末期以降、日本から取り入れた和製漢語である。社会科学など学術用語の約7割が、英語・ドイツ語から翻訳した和製漢語である。日本は漢字を熟成させ、和製漢語を創り出し、中国や韓国へ逆輸入し、和製漢語を通して、中国や韓国へ現代文化を伝え、近隣の中国や韓国へ

の近代化に貢献できた。このこと現象が、フリップ・フロップ、またはバタフライ現象であると考えられる。終戦後、GHQ<sup>23</sup>から日本語廃止論が提案されたが、日本は独自の文化を維持することで、外来語は片仮名で表し、同時にローマ字教育も進められた。現在のコンピュータ時代に入って、言語の表現方法も時代と共に変って来た。例えば、「新人類」「超～」 「医学新幹線」などは、中国語にない新しい言葉であるが、自然に中国人の日常会話に入り込んでいる。

### 5-7. 和製漢語にまつわる中国留学生の努力

清朝政府は1872年から1876年まで、120名の少年をヨーロッパへ派遣。80年代には中止。中国の近代化担う人材育成は日清戦争以降で、西洋より、日本の方が効果的で合理的であるという声が出始めた。洋務運動を推進して来た湖広総督張之洞、実務官僚や知識人が応援して、日本の近代化を学ぶことになった。1896年官費留学生13名が日本へ派遣された。1889年には100名を越え、1902年400名から500名、1903年には1000名、1906年には8000名、日露戦争後の結果、1905年科举制度が廃止された。当時翻訳された書物は政治、経済、哲学、宗教、法律、歴史、地理、産業、医学、軍事、文学、芸術など<sup>24</sup>、マルクス・エンゲルスの『共産党宣言』から川口章吾の『ハーモニカ吹奏法』まで、社会科学と自然科学のあらゆる分野に渡っている。1902年から1910年に留学した学生は自費で来ている者は、18人中12人、年齢は22歳から30歳、その氏名は金華祝、喻懷亮、李歩青、李実栄、左徳明、張繼煦羅 襄、王式玉、憑開濬、周龍驤、李 金、談錫恩胡 錚、陳鴻業、陳文哲、李 熙、程明超、萬声揚、向国華、紀 鴻、馬毓福、周維禎、沈明道、余徳元、陳英才、王 邑、盧弼、李書城、汪歩揚、陳栄境、施呼本、阿勒精阿等がいる<sup>25</sup>。1911年までの東京高等師範学校で学んだ留学生は許寿裳、章毓蘭、銭家治、談錫恩、陳英才、張邦華、毛邦偉、王海鏞、黄際遇、朱文熊、陳衡格、鄧瑞槃、陶履恭、王 脩、何瑁先、牛宝善、経亨頤、黄恭憲、洪彦遠、任 誠、張胎恵、杜 蘭、鳳 高、彭世芳、葉 謙、楊昌寿、楊立奎、劉以鐘、劉 煥、林元喬、林道容等がいる<sup>26</sup>。彼等は教育、地理、植物、動物、西洋史、化学、倫理、法制経済、数学、生理衛生、農学、博物学、歴史、数物化学を聴講生・専科・本科という身分で、学習した。また、速成師範科の修業年限は1年で、履修科目は、倫理学、日本語、地理、歴史、博物学、化学、物理学、図画、音楽、体操、心理学、教育学、各科教授法、学校管理法、日本教育制度、実施授業など。直隸省速成師範班授業科目には、教育学

<sup>23</sup> GHQ 総司令部 (General Headquarters) の略。日本では、第二次世界大戦後に日本を占領統治した連合国軍最高司令官総司令部 (GHQ/SCAP) を指す。

<sup>24</sup> 昭和14年〔1939〕3月 実藤恵秀著 中国人日本留学史稿 財団法人 日華学会」とある序によれば、「本書ハ日華学会昭和十一年十一月二十五日発行第五十八号ヨリ昭和十三年十二月十三日発行第七拾壹迄十一回ニ互リ学報ニ連載シタ。

<sup>25</sup> 宏文学院へ湖北省師範生160名 (1902年)

<sup>26</sup> 1911年までの東京高等師範学校卒業留学生



(付き心理学)、教授法(付教科書編纂法)、地理学(付地文学)、法制経済学、博物学(動物、植物、生理)日本語文、教育制度(日本、欧米)、学校管理法、歴史学(近世外交史)、数学(分数、少数、開平、開立、代数)、理化学(物理化学実験)がある。宏文学院師範科教職科目担当教員は江口辰太郎(教育学)、棚橋源太郎(教科書編纂法)、中谷延治(教育学)、大久保介寿(学校管理法)、樋口勘次郎(教育学)、増戸鶴吉(日本教育制度)、高島平三郎(教育学)、小泉又一(学校制度)、小山左文二(学校管理法)、大林銅造(各科教授法)、稲垣末松(日本教育制度)である。1902年以降派遣はなくなった。その理由は、暗記、考古、学芸を重んじ、解説や時事などを無視した教育と教員不足である。1906年以降、清朝は速成留学生も中止した。その理由は、初めの留学生が育ち、中学レベルの教育ができるようになったからである。

## 5-8. 現代中国語に溢れている日本語

多くの中国留学生の翻訳活動により、現在でも使用されている和製漢語は以下のとおり約750語である。

㊦揚棄・味之素 ㊧医学・意志・意識・意識形態・一元論・市場・一覧表・意図・意味・入口・陰極・印刷品・印刷物・隠花植物 ㊨打消・右翼・運動・運動場 ㊩衛生・營養・液体・演繹・園芸学・演習・演出・演説・演奏・鉛筆 ㊪大型・大熊座・温室・温床・温度 ㊫概括・会計・解決・外在・概算・海事・回収・改善・改造・会談・階段・概念・外分泌・解法・解剖・潰瘍・改良・概論・会話・化学・科学・学位・学士・革命・学齡・可決・加答児(扁桃腺)・仮死・貸方・瓦斯・火成岩・仮説・河川・仮想・片艶・学期・価値・活動・糧・假定・課程・過渡・寡頭政治・可変資本・借方・仮積・癌・環境・玩具・関係・幹事・感性・管制・間接・歓送・寒帯・関手・鑑定・觀念・幹部・管理・寒流・韓流 ㊬議案・議員・機会・機械・議會・機関・企業・議決・技師・基準・規則・気体・基地・吉地帰納・規範・希望・義務・客体・脚本・客観・休戦・教育・強化・協会・協議・狭義・供給・共產主義・教授・行政・協定・共同・業務・共和・巨額・局限・距離・記録・珎(キログラム)・秆(キロメートル)・金額・金庫・銀行・緊縮・緊張・勤務 ㊭空間・空襲・警報・偶然・具体・駆逐艦・組合・俱樂部・軍国主義・軍事・軍需品 ㊮計画・景気・経験・輕工業・經濟・經濟恐慌・警察・形而上学・芸術・系統・刑法・經理・劇場・下水道・結核・決算・欠点・權威・牽引車・現役・顕花植物・現金・原子・現実・現象・原則・現代・建築・検討・幻燈・検波器・懸壅垂(喉チンコ)・憲法・權利・㊯交換・交感・・交感神經・広義・抗議・講義・工学・工業・交響楽・航空母艦・工芸美術学・広告・講座・交際・公債・高周波・攻守同盟・交渉・甲状腺・公証人・光線・交戦団体・構造・膠着・高潮・交通・肯定・高利貸・交流・拘留・小型・国際・公法・克服・小熊座・互惠・故障・固体・固定資本・箇別米・孤老・混凝土・根本的 ㊰最恵国・債權・最後通牒・財政・財団法人・財閥・細胞・催眠術・債務・財務・材料・催涙弾・索引・作戦・作品・作物・雑誌・作用・左翼・三角・参



考書・算術・三輪車 ☑紫外線・時間・試験・時効・支持・市場・指数・自然・自然科学・思想・視為・自治・思潮・執行・質量・支店・指導・地主・思惟・支配・自白・自発的・支部・事変・資本社会・社交・社团法人・社用・自由・周期・週期・宗教・集合・重工業・住所・集団・集中・重点・周波・主観・主義・宿舍・主権・手工業・主食・主席・主体・手段・出席・出訴・出超・出廷・出版・主動・主任・主筆・手榴彈・巡洋艦・消音器・消化・消火器・消火栓・使用価値・商業・消極・条件・常識・症状・上水道・消毒・承認・蒸発・消費・常備兵・商品・消防・情報・静脈・職員・処刑・処女作・所得権・所得税・初歩・資料・進化・侵害・人格・新奇・真空管・神經・神經過敏・神經衰弱・人權・信号・侵蝕・申請・人生観・進展・進度・人道・侵犯・新聞・新聞記者・進歩・信用・心理・人力車・侵略  
 ☒図案画・水成岩・数学・数量 ☑請願・世紀・請求・制裁・政策・生産・生産関係・生産手段・生産力・政治・静態・静力・政党・性能・政府・生物学・成分・制約・生理・世界観・石油・説教・積極・接近・絶対・説明・節約・摂護腺・宣誓・宣戰・前提・専売 ☑総計・倉庫・綜合・想像・相對・総体・曹達・総動員・総理・促進・促成・組織・即決 ☒体育・対応・退化・退却・体験・代言人・対称・対象・代数・体積・体操・对比・代表・大本营・太陽燈・代理 ☑地質・地上水・腔・窠扶斯(チッソガス)・抽象・調製・超短波・長波・直接・直流・直覺 ☑：对手・通貨収縮・通貨膨張 ☑低圧・提案・低温・定額・定義・提供・偵察・停止・低周波・停戰・低潮・低能児・出口・哲学・手續・鉄道・展開・電気通信学・電業・典型・電子・電車・電信・伝染病・電池・伝統・電導體・電波・伝播・伝票・展望・電報・展覧会・電流・電力・電話 ☒動員・灯火管制・導火線・登記・投機・動機・動議・道具・動向・動産・投資・謄写版・鬭争・動体・動態・投票・動脈・動脈硬化・同盟・同盟罷工・動力・独裁・特殊・得数・独占・特徴・特別・特務・特約・図書館・特許・突撃隊・特権・土木工学・土木工程・虎列刺(トラコーマ)・取消・取締・噸 ☑内在・内服・内分泌・内容・内用・成為・軟化 ☑二重奏・入場券・入超・認可 ☑熱帯・年度  
 ☑農作物・農民・☑場合・配給・背景・配電盤・迫害・迫撃砲・博士・舶来品・博覽会・派遣・破産・派出所・場所・場面・破門・馬鈴薯・反映・版画・反革命・判決・番号・反射・反对・判断・反動・反応 ☑美化・美学・悲観・美感・引渡・否決・美術・微積分・必然・必要・否定・被動・否認・批判・批評・備品・百貨店・表演・表決・表現・表象・表情・病虫学・病理学・呷 ☑諷刺・復員・複写・復習・服從・副食・服務・不景氣・武士道・舞台・双子座・物質・不動産・不変資本・文化・文学・文庫・分子・分析・分配・文法・文明  
 ☑併發症・變圧器・偏見・弁護士・便所・弁証法 ☑法医学・法科・法学・防空演習・封建・報告・方式・放射・放射線・傍証・方針・法人・放送・法則・法定・方程式・法廷・方法・方面・法律・簿記学・保健・保釈・保証・保障 ☑碼・哩  
 ～炎(胃炎等)・～化(近代化等)・～界(芸能界等)・～階級(上流階級等)・～学(医学等)・～型(最新型等)・～感(直感等)・～観(人生観等)・～作用(光作用等)・～式(方程式等)・～時代(戦国時代等)・～社会(人間社会等)・～主義(民主主義等)・～性(独創性等)・～

線（在来線等）・～腺（扁桃腺等）・～力（風力等）・～的（近代的等）・～点（通過点等）・～法（演繹法等）・～物語（竹取物語等）・～問題（教育問題等）・～率（出席率等）・～論（カオス理論等）<sup>27</sup>

## 6. 現代の漢字

### 6-1. 日本の現代漢字事情

中国や台湾で使用されている漢字の字数は、前述のように約6万字あるが、日本漢字検定試験に出題されている漢字は、常用漢字を含めて、約6千字である。両方を比較すると、日本の方は、約一桁少ない。漢字検定の受験者数は、2001年の859,902人から2008年の1,513,969人まで増加している。最近、少子化や学力低下による漢字離れを防止するために、テレビの漢字クイズ番組や漢字検定などの奨励で、漢字ブームが起こっている。漢字検定試験は1975年に開始され、常用漢字1945字を含めて、約6千字（JIS第二水準）の漢字の読み書きが出来ること、熟字訓、当て字、対義語、類義語、同音・同訓異字、四字熟語が理解できること、国字が書けること、地名・国名の漢字表記が読めること、故事成語・諺を正しく理解できることなどの検定試験が行われている。そのランク分けは、準1級（大学・一般程度、2,958字）常用漢字を中心に約3000字（JIS第一水準<sup>28</sup>を目安）、2級（高校卒業・大学・一般程度、1945字、ほかに人名用漢字）、準2級（高校在学中程度、1945字）小学校・中学校で学習する常用漢字、3級（中学校卒業程度、1,608字）小学校でならう常用漢字+常用漢字600字、4級（中学校在学程度、1,322字）、5級（小学校6年生修了程度、1,006字）、6級（小学校5年生修了程度、825字）、7級（小学校4年生修了程度、640字）、8級（小学校3年生修了程度、440字）、9級（小学校2年生修了程度、240字）、10級（小学校1年生修了程度、80字）となっている。

漢字検定に出てくる熟字訓（単字単位でなく熟字単位で訓読みを当てたもの）に、次の漢字がある。

- 1）暦・季節・時間に関するもの：一昨昨日、一昨日、昨日、今日、明日、明後日、一日、晦日、如月、弥生、皀月、師走、今年、今朝、十六夜、七夕、一寸
- 2）人称に関するもの：下手、大人、従兄弟、叔父、伯父、叔母、伯母、玄孫、二十、女将、処女、乳母
- 3）自然に関するもの：梅雨、時雨、五月雨、雪崩、吹雪、陽炎、紅葉

<sup>27</sup> 昭和14年〔1939〕3月 実藤恵秀著 中国人日本留学史稿 財団法人 日華学会」とある序によれば、「本書ハ日華学会昭和十一年十一月二十五日発行第五十八号ヨリ昭和十三年十二月十三日発行第七拾壹迄十一回ニ互リ学報ニ連載シタ。

<sup>28</sup> 第1水準は、当用漢字字体表、当用漢字補正案および人名用漢字別表を基本として、多種の漢字表に共通して出現する文字が選ばれた。

- 4) 動植物に関するもの：土筆、女郎花、山葵、百合、水母、海月、海老、烏賊、小豆
- 5) 食べ物に関するもの：心太、果物、灰汁、河岸、海女
- 6) 生活用品：眼鏡、足袋、竹刀、団扇、松明、蚊帳、浴衣、母屋、
- 7) 文化に関するもの：大和、流鏑馬、太刀、山車、お神酒、神楽、祝詞、女形、土産、田舎、相撲、鍛冶
- 8) その他：欠伸、九十九、台詞、二十、八百、為替、可笑（しい）、美味（しい）、流石、老舗、相応（しい）

以上の熟字訓を含め、最近の上級テストが実施されている。日本の漢字に対する受容における特徴は、中国の漢字に対して、直接に受け入れるのではなく、間接的にそれを拒否するのでもない、自発的に徹底的にそれを消化し、自己の必要に応じて熟成し、独自の言語にする。それが故に、漢字は日本に確実に根を下ろし、西洋文化の波に耐え、日本独自の言語を作り出した。漢字文化圏の中の韓国・日本・中国・台湾のうちで、日本は最も漢字による表現力の優れた地域である。

## 6-2. 中国の現代漢字事情

第二次世界大戦終結後、日本と中国では、膨大な数の漢字と、画数の多い煩雑な漢字が、国民の学習を妨げているという認識の下に、学習負担軽減と識字率向上を目指して、漢字の削減と簡略化が進められた。その方法は、以下である。

- 1) 異体字の整理について、偏、作りが異なるものの簡略化で一部を残す方法の例。

紅→**红**、話→**话**、飲→**饮**、輪→**轮**、銀→**银**、現→**现**、問→**问**、財→**财**、項→**项**、等がある。

- 2) 漢字の簡略化について、一部分を抜き出して使用する簡略化の例。

関→**关**、広→**广**、気→**气**、郷→**乡**、児→**儿**、開→**开**、飛→**飞**、電→**电**、等がある。

- 3) 漢字の形態の全く異なる漢字の簡略文字の例。

頭→**头**、個→**个**、楽→**乐**、葉→**叶**、幾→**几**、義→**义**、嚴→**严**、豊→**丰**、発→**发**、雑→**杂**、動→**动**、衛→**卫**、従→**从**、書→**书**、馬→**马**、歴→**历**、買→**买**、為→**为**、專→**专**、無→**无**、長→**长**、図→**图**、売→**卖**、様→**样**、等がある。

- 4) 元の漢字と微妙に異なる字体の文字の例。

単→**单**、魚→**鱼**、強→**强**、辺→**边**、変→**变**、営→**营**、卷→**卷**、団→**团**、効→**效**、処→**处**、歩→**步**、圧→**压**、収→**收**、決→**决**、等がある。

以上が中国における文字の簡略化の方法である。現在、中国大陸はほとんど上のような簡体字を使用している。また、マレーシアやシンガポールは1981年からも独自の「馬新簡体字」を使用している。学校教育も簡体字しか教えず、繁体字の読解力が低下しつつある。一方、台湾や香港や北米の華僑社会などでは繁体字を使い続けており、簡体字があまり読めないという人が多い。台湾で行われた電話による世論調査では、45%が簡体字を全く読めない、

41%が少し読める、完全に読めると答えたのは14%であった<sup>29</sup>。さらに、中国文字の簡略化は1955年の中国文字改革委員会が「漢字簡化方案草案」を発表し、1956年には正式に公表された。514字の簡体字と54の簡略化された偏や旁が採用され、簡略化はすべて日清戦争敗戦後、日本の近代化を学ぶために清国から緊急に派遣された政治・経済・哲学・宗教・法律・歴史・地理・産業・医学・軍事・文学・芸術などの分野の国費師範生達や私費留学生達が帰国して各分野で後進の人材育成に努めた成果の現われである。漢字文化圏に属する多くの国家や民族を見回してみると、漢字をこのように創造的に可變的にお互いに国の事情や時代の流れの中で都合の良いようにすり替えて、字体を変えて使用している。このような現象をカオス理論から見ると、中国現代の簡体字は日本の和製漢語の影響を受けて独自に作り直したものである。バタフライ現象のように僅かな変化で大きく字体が変わっているもの、変化の少ないものもある。例えば、中国本来の漢字の對・寫・處・圓・澤・廣（廣）・過（過）・龜（龜）を和製漢語（常用漢字）の対・写・处・円・沢・広・過・亀などを参考にして、その影響を受けて、中国簡体字すなわち、对・写・处・圆・泽・广・过・龟などのように変化している。日本の和製漢語の導入で中国の漢字簡略化ができた。その成果により、中国は短い期間で近代化が進められた。率直に言えば、これは日本の恩恵である。或は、中国の先人が漢字を創って日本へ伝えたお陰で効果が発揮された。まるで積善の家に慶<sup>30</sup>があり、長い期間をかけて、自分の子孫の難を救うことになった。また風が吹けば桶屋が儲かるように、漢字は生き物で、どういう風に時代と共にバージョンアップしていくかは想像できない。三次元方程式の線形に乗って行くか、それとも非線形に飛んでいくかを追求することがこれからの課題となる。

日本は第二次世界大戦の敗戦から高度経済成長を経て、バブル経済が崩壊した後も、東アジアの中で比較的高い経済水準を維持している。21世紀において、日本は「知の回廊」の「結節環」になっている。（図-2）

図-1、2は日本への漢字文化の輸入と逆輸入を示す。このサイクルは約千年のスパンであった。中国で象形文字の発明以来、日本への漢字の輸入までに、約千年の時間を要していた。さらに、日本から中国へ遣唐使を派遣した時代から明治維新までの約千年の歳月を経ている。従って、バタフライ現象のサイクルは、およそ千年のスパンで、漢字は日本から中国へ新しい形で回帰したことになる。このようなリズムは新しく日中両国の緊密な関係により、相互の言語が交じり合い、新しいカオスの時代に突入するものと考ええる。異文化コミュニケーションを密接にしたり、発散したりして行くことが考えられる。現在の中国は人口13億人の経済大国で、文化の発展にも凄まじいものがある。漢字は生活に基盤を持つ生き物で

<sup>29</sup> 中時電子報。2008年度国民電話の「簡体字認識について」のアンケート調査により。

<sup>30</sup> [ほ] 積善の家には必ず余慶（よけい）あり。いいことをしていると、きっと幸運が舞い込んでくるというほどの意味です。善は貯金に似て積み立てるものらしい。



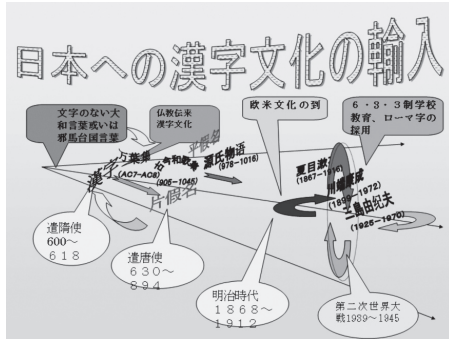


図-1 日本への漢字の輸入

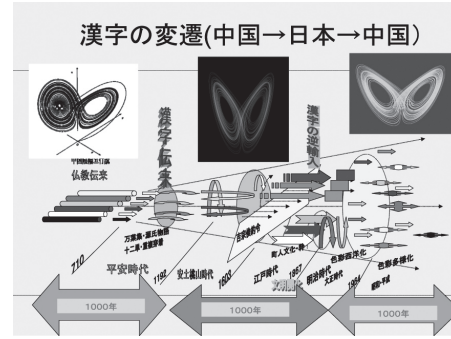


図-2 漢字の変遷

情報を伝える媒介物である。これからの漢字と言葉はどのように変化していくのか興味がある。お互いの意思を交信するのに欠くことのできない道具である。

## 7. おわりに

文学部門でも、人間はその地域・風土に合う感性を混沌の中で、人間の意志を言葉で表現し、記録や伝達のために文字を使って、その文化を残している。様々な形の文化があり、その周縁の文化を創り推敲し維持してきた。漢字は「六書」即ち、象形・指事・会意・形声・転注・仮借により作られているが、日本はこの漢字から仮名を創りだし、非線形的文字にアレンジしていった。そして、平安時代に文字文化の開花時代を迎えた。明治時代以降、欧米からの文明が押し寄せ、日本は欧米の先進的な科学技術を吸収し、それを漢字に翻訳した。中国の留学生は、日本が先に翻訳した和製漢語を通じて、欧米の文明を理解した。まるで、日本が遣隋使や遣唐使の時代に中国文化を学び取った時のように、和製漢語を中国へ持ち帰った。現在も何の抵抗もなく、その和製漢語を中国で自然に通用させている。漢字の変遷では、中国で出来た漢字を、千年後に日本へ伝え、それから、約千年後の明治時代に、西洋の文化を翻訳した和製漢字が中国へ伝えられた。このような千年のスパンで、漢字が今も両国の交流に役立っている。これはカオス理論のバタフライ現象に通じ、千年の間隔で中国から日本、日本から中国へと漢字文明が帰帰している。中国自体は識字率を高める為に漢字を簡略化して、簡体字を使い、さらに、GHQの強い要請により、読み仮名をローマ字ピンインにした。中国でも以前の注音符号をローマ字ピンインにした。このような現象は、線形方程式から非線形方程式へと変化している現象と言える。韓国は1970年小学校での漢字教育は廃止し、1972年廃止を撤回した。中学、高校で漢文教育が復活したが、韓国の小学校での漢字の教育は行われていない。1998年金大中大統領は漢字復活を宣言したが、小学校での漢字教育義務付けや若年層での漢字使用の日常化は実現されなかった。このため現在、漢字の必要性を感じる韓国人は自己負担で子供を漢字塾に通わせて教育している。2003年



11月韓国教育開発院が発表した韓国の漢字の識字率は、75.28%に達している。韓国では、漢字文化圏からかなり遠くの方へ進んでいる。これは定形方程式から離れつつあると考えられる。

欧米で研究されたカオス理論が日中両国の長い一衣帯水の交流の中で、地域的、民族的生活環境、及び、時間的な要因の中で、両国が漢字を通じて、独自に文化を育んできた現象は回帰的な現象、バタフライ現象と合致するものがあると考え、日本の漢字と言語文化の同一性と一体化しきれない現象から、中国で漢字が創られて千年、遣隋使や遣唐使から明治までの千年、日本は中国の近代化に和製漢語に貢献し、新しい漢字を導入したことになる。これはバタフライ現象の回帰に近い現象であると考えられる。筆者は、カオス理論から見て、日中間および漢字文化圏の交流を深め、漢字の将来を見つめ、今後もこの研究を進めていく。

#### 参考文献

- |                          |                |        |
|--------------------------|----------------|--------|
| シャルル・イグーネ著（矢島訳）『文字』      | 白水社 文庫クセジュ     | 1956年。 |
| ムーアハウス著（めずまさし訳）『文字の歴史』   | 岩波新書           | 1956年。 |
| 宇野精一監修『漢検 漢字辞典』          | 日本漢字教育振興会編     | 1999年。 |
| 加藤一郎著『象形文字入門』            | 中公新書           | 1958年。 |
| 加藤常賢著『漢字ノ起原』             | 斯文会            | 1949年。 |
| 家来氏武四郎著『漢字の運命』           | 岩波新書           | 1952年。 |
| 河出書房『定本書道集』 一            | 河出書房           | 1956年。 |
| 貝塚茂樹編『古代殷帝国』             | みすず書房          | 1957年。 |
| 貝塚茂樹編『図説世界文化史大系』         | 角川書店           | 1954年。 |
| カールグレン著（岩村・魚返訳）『支那言語学概論』 | 文求堂            | 1940年。 |
| 金祥恒編『続甲骨文編』              |                | 1959年。 |
| 金田一春彦著『日本語（新版）』（上）（下）    | 岩波新書           | 1988年。 |
| 桂馥著『説文解字義証』              |                |        |
| 犬飼隆著『木簡から探る和歌の起源』        | 笠間書院           | 2005年。 |
| 五木寛之、福永光司著『道教人間学—混沌の発展』  | 致知出版社          | 1997年。 |
| 高津春繁・関根正雄著『古代文字の解説』      | 岩波書店           | 1964年。 |
| 高田忠周著『古籀編』               | 同刊行会           | 1925年。 |
| 笹原宏之著『位相文字の性格と実態』        | 日本国語研究所        | 2002年。 |
| 徐灝声著『説文解字注箋』             |                |        |
| 商務印書館『精選日中、中日辞典』         | 東方書店           | 1994年。 |
| 小松茂美著『かな（その成立と変遷）』       | 岩波新書           | 1968年。 |
| 小學館共同編著『日中辞典』            | 小學館            | 1987年。 |
| 小學館共編『中日辞典』              | 小學館            | 1992年。 |
| 上野恵司著『ことばの文化背景』          | 白帝社            | 1997年。 |
| 水野清一著『世界考古学大系』 六         | 平凡社            | 1958年。 |
| 石川九楊著『漢字がつくった東アジア』       | 筑摩書房           | 2007年。 |
| 石川九楊著『漢字の文明 仮名の文化』       | 商務印書館・農山漁村文化協会 | 2008年。 |
| 川喜田二郎著『KJ法和未來學』          | 中公新書           | 1995年。 |
| 倉島長正著『国語100年』            | 小学館            | 2002年。 |
| 孫海波編『甲骨文編』               |                | 1934年。 |
| 村田雄二郎・C・ラマール編『漢字圏の近代』    | 東京大学出版会        | 2005年。 |

大原信一著	『近代中国のことばと文字』	東方書店	1994年。
大西克也・宮本徹著	『アジアと漢字文化』	放送大学教育振興会	2009年。
段玉裁著	『説文解字注』		
竹内実著	『中国という世界（人・風土）』	岩波新書	2009年。
中国科学院考古研究所	『甲骨文編』		1965年。
中島竦著	『書契淵源』	文求堂	1937年。
丁福保著	『説文解字詁林』		1928年。
張公瑾 丁石慶 主編	『中国語混沌学研究』	中央民族大學出版社	2005年。
張公瑾 丁石慶 主編	『渾沌學與語言文化研究新視野』	中央民族大學出版社	2008年。
津田一郎著, 松野孝一郎著	『複雜系化學和現代思想』		1997年。
藤堂明保著	『漢字語源辞典』	学燈社	1965年。
白川静著	『説文新義』	五典書院・白鶴美術館	1968年。
白川静著	『文字講話』 I、II	平凡社	2002年。
白川静著	『甲骨文集』 一冊	二玄社	1963年。
白川静著	『金文集』 四冊	二玄社	1963年。
白川静著	『金文通訳』	白鶴美術館	1962年。
白川静著	『甲骨金文学論叢』 十集	立命館大・研究室	1955年-1962年。
平田昌司著	『目の文学革命・耳の文学革命』	『中国文学報』 第58冊	1999年。
平凡社	『書道全集』 第一巻		1954年。
容庚編	『金文編』		1955年。
李孝定著	『甲骨文字集釈』	中央研究院歷史語言研究所	1965年。
李大川編纂翻譯	『元極學混沌出開法』	baseball magazine 出版社	1995年。
學習研究社編集	『新版 難讀漢字辞典』	學習研究社	

(みずはら じゅり 本学非常勤講師)